

豚

中野
劇団

豚

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

三上

田原

喫茶店。売り手の三上と買い手の田原が向き合って座っている。

田原　それって、三上さんの所の豚を今後うちに卸せないってことですか？

三上　卸せない……。まあそちらの言い方だとそうなりますね。

田原　それって理由があるからですか。金額的な部分ですか？　確か

に値段を下げるようにお願いしましたけど、それでもこのご時世から考えると、そこまで買い叩いているわけでもないと思うんです。

三上

……そうかも知れません。……いやそうじゃないんです。

田原

そうじゃない……。三上さんのところの豚はお客さんにも凄く好評なんです。勿論それだけ手間がかかっていることも重々承知しています。

三上

うちがね、おたくと、……田原さんの所とお仕事させてもらうようになったのは、あなたのお父様、先代の社長さんの頃からです。

田原

ええ。四十年以上のお付き合いだと聞いています。

三上

田原サーカス団と言えば、当時は日本でも指折りの人気サーカス団でした。田原さんみたいな人気のサーカス団が、うちで芸を仕込んだ豚を使って下さっている。父はそのことを長年誇りにしてきました。

田原

……うちがサーカスでやっていけなくなっ、料理屋に仕事を変

えたのは父の時代です。三上さんの豚はとても評判で、うちが料理屋として成功できたのには三上さんの豚のお蔭と言っても過言ではありません。

三上 何でうちの豚を料理に使うんですか。

田原 え？

三上 料理に使うんだったら、最初から精肉用の豚として飼育すればいいわけですよ。

田原 ところが三上さんがしっかり芸を仕込んだ豚はどういうわけか格別に味がいいんです。

三上 知りませんよ。美味しく育ててたわけじゃないんで。

田原 勿論わかっていますよ。三上さんの所が「げい」の豚を育てていることは。

三上 ゲイの豚って何ですか。

田原 ……うちは動物が売りのサーカス団でした。子供たちにも人気で、ライオンの火の輪くぐり、ゾウの輪投げ、そして三上さんの豚の

三上

シヨ―はウチの自慢の出し物でした。……いつの頃からか、動物愛護団体なんかいろいろ言うようになって、毎日のように嫌がらせがあつて、世間もそれに同調して、動物は使いにくくなつたんですよ。おかしな話ですけどね、生かして使うより殺して使う方が世間体はいいんです。動物にすりゃ生きられた方が幸せなんじゃないのかつて私個人は思いますけどね。勿論キリンやゾウを食べるわけにはいきませんけど。

いや、そちらの事情がどうか知りませんが、少なくともうちはサーカスで芸ができる豚として売っていたわけです。それも毎回同じ芸では芸がない。常に新しい芸を日夜考えて考えて……。勿論動物愛護団体のそういう意見があるっていうのもわかっていましたから、鞭を使わずに、できるだけ虐待だつて言われにくい芸にしようつて。まあ、芸を仕込んである時点で虐待だつて言われれば返す言葉もないですけど、それはそれは、気も遣つてましたし。……それなのに、すぐにお肉にしてたなんて。

田原

知らなかったのですか？ サークスから料理屋に商売を変えたのは父の代からですよ。

三上

……。

田原

本当に知らなかったのですか？ うちの店はホームページも開設してるし、グルメ記事にも度々載せてもらってました。

三上

知らないです。父は売った先で豚がどんな風に扱われているのかわらうとしなかったんで。知ったら、辛くなることもありますから。私も同じ意見です。売ったわけですから。自分達の手を離れるわけですから。その先でどんな調教のされ方をしているか、どういう扱いを受けていても意見を言うべきではない。だったら何も知らない方がいい、そう思っていました。けど、食用にするんだっ
たら。

……。

田原

先代の社長さんはうちの豚は人気だとずっと手紙をくれていました。全部取ってありますよ。「ユメコ」は神経質とか、「マルオ」

は悪戯好きだとか。みんなお客さんに大人気だって。うちの親父は、その社長さんの手紙を生き甲斐にして、より喜んでもらえる芸を豚に仕込み続けたんです。そりゃ父だって薄々気づいていたと思いますよ。サーカスの豚にしてはやたら頻繁に買われてたし。だけど、敢えて真実を知る必要はない。ところがあなたが社長になって、料理に使っててることを隠さなくなった。伝票に「とんかつ用の豚」って。それを見た時の父のやるせない顔ったらありませんでした。「何だよとんかつ用って」って。

田原

……手紙のことは、知りませんでした。

三上

「ほかのブランド豚にもっと安くて美味しい豚がいるから、もう少し安くしてほしい」って？ だったらその安くて美味しい豚を使えばいいじゃないですか！ うちの芸の出来る豚を育ててたんです。

田原

私も父も、三上さんの所の豚が好きなんです。

三上

味がでしょ！

田原 味がです。

三上 だったら最初から食用として飼育します。それでいいじゃないですか。

田原 芸を仕込んだ豚じゃないとダメなんです。

三上 その芸を見ることもなくとんかつにしてるわけでしょう？

田原 だったら、次から私が芸を見ます。

三上 何なんですかそれ。それはあなたが芸を見てからとんかつにするってことですか？

田原 いやあだって、お客さんに芸を見せてから捌くわけには。

三上 そりゃそうでしょ！ だから、芸、要らないでしょ？

田原 要らなくないんです。決して無駄ではないんです。「芸は身を助く」とは良く言ったもんです。三上さんが芸を仕込んだ豚は、本当に評判がいいんです。

三上 味がでしょ！

田原 味がです。

三上

……じゃあ例えはあなたのお店で作られた最高のとんかつを、毎日出前で買ってくれるお客さんがいたとします。そのとんかつを毎日犬のエサに使っていたとしたら、どうです？

田原

三上さんの所の豚を使ったとんかつをですか？

三上

何かブーメランみたいになってますけど。

田原

犬ってとんかつ食べるんですか。

三上

食べるでしょ。喩え話なんでその辺はいいじゃないですか。

田原

何で犬のエサに？

三上

犬が喜ぶからです。そこのご主人は一度もおたくのとんかつを食べたことがなくて、毎日犬が食べていたんです。そのお客さん、流石に田原さんの所のとんかつを犬にあげていることは黙っていたのに、その家族がにあなたに言うんです。「うちのわんちゃん毎日美味しく食べてます」って。

田原

……サーカス用の豚が犬に食べられて、三上さんは納得できるんで——

三上 あなたに聞いてるんです！ 納得できますか？

三上 ……いやでも、うちは人にね、食べてもらうために料理を作ってるわけですから。

三上 こっちはサーカス用の豚として育てていたわけです。

田原 でもサーカスの豚なんて、今の時代売れないじゃないですか。

三上 それをおたくが言うのはおかしいでしょ！

三上 ……こんなこと言うのはあれですが、うちが買わなければ三上さんはどうやって収入を得るんですか。どうやってやっていくんですか。

三上 ……普通に食用として豚を卸しますよ。

田原 芸を仕込んだお肉じゃないと、買い手なんてつきませんよ。

三上 芸を仕込んだお肉って何ですか！

田原 ……ちよっとこの後予定があるので、今日のところは失礼させていただきます。お時間すいませんでした。……今度一度是非うちに食べに来てくれませんか？ そしたらきっと納得していただ

ると思うんです。

三上

その前に、一度芸を見てもらえませんか？

田原

……。

終わり。